

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12870

研究課題名(和文)1894～1896年戦争の記憶に関する比較文学的調査・研究

研究課題名(英文)Studies of Comparative Literature about Memories of The Sino-Japanese War

研究代表者

樋口 大祐(HIGUCHI, DAISUKE)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90324889

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、1894～1896年戦争に先行する1870～1890年代、当該戦争時期、および戦争終結以降における当該戦争をめぐる諸言説に注目し、その語られ方の比較検討を通して、東アジア各地域の歴史認識の対立を規定する構造的諸条件の一端を明らかにしようと試みた。その結果、研究期間を通じて、論文5本(共著の分担執筆2本を含む)、国際学会を含む学会・研究会発表計6回の研究成果を得た。本研究の問題意識の一部は、2018年度科研費助成事業(基盤研究C)の研究課題「『帝国日本形成の物語』(西南・日清・日露各戦争)の成立に関する調査・研究」(課題番号18K00317)に引き継がれている。

研究成果の概要(英文):In this study, I aimed to clear a part of the structural situations that cause of the conflicts about historical understandings about modern East Asian history, through comparative considering about the narratives in each nation about the Sino-Japanese War. During the study period of three years, I publish 5 papers, and read 6 papers at academic meetings, including international conferences.

I developed the parts of themes of this study in my new study of grant for scientific research of JSPS, which started in 2018.

研究分野：日本文学

キーワード：戦争 記憶 語り 東アジア 帝国 他者 感情移入 メディア

1. 研究開始当初の背景

1894～1896年戦争は通常、日清戦争と呼ばれるが、実際には朝鮮半島や台湾でも戦争が行われ、関係諸地域のその後の歴史の方向を大きく規定した。この史実が日本の言説空間において十分に記憶されていないこと自体が、現代における各地域の歴史認識のずれを生み出す要因の一つになっていると言える。

当該戦争については藤村道生『日清戦争』（岩波新書、1973年）等、歴史学に多くの蓄積があり、近年は大谷正『兵士と軍夫の日清戦争』（有志舎、2006年）等、報道写真や従軍兵士の日記等を活用したメディア史的研究が盛んである。また、日朝戦争については中塚明ほか『東学農民戦争と日本』（高文研、2013年）、日台戦争については黄昭堂『台湾民主国の研究』（東京大学出版会、1970年）等の研究が存在する。日本文学研究でも、森鷗外、泉鏡花、樋口一葉、国木田独步等のテキストと当該戦争の関係を論じた研究のほか、閔妃暗殺事件の報道を分析した内藤千珠子『帝国と暗殺』（新曜社、2005年）、樋口一葉の和歌を分析した菅聡子『女が国家を裏切るとき』（岩波書店、2011年）、演劇や歌謡を通して国民の形成を論じた佐谷真木人『日清戦争』（講談社、2009年）等が存在する。しかしこの戦争を通じて確立された帝国日本意識が、東アジアの分断を齎したことの影響の深度についての研究はまだ充分ではない。

応募者は『乱世のエクリチュール』（森話社、2009年）『変貌する清盛』（吉川弘文館、2011年）等で前近代日本における記憶の抗争を扱い、2010年度以降は科研費基盤研究(C)『東アジア「伝」文学の比較文学的調査・研究』において、宮崎滔天を論じた「鄭成功の子どもたち」（千本英史編『「偽」なるものの「射程」』勉誠出版、2013年）、「琉球処分」の歴史叙述（島村幸一編『琉球』勉誠出版、2014年）等の研究を行ったが、その過程で当該戦争をめぐる諸国家間の記憶の抗争について研究することの必要性を痛感するに至った。以上が本研究の学術的背景である。

2. 研究の目的

本研究は1894～1896年に東アジアで行われた一連の戦争（日朝戦争、日清戦争、日台戦争）の記憶の語られ方を比較検討することを通して、東アジア各地域の歴史認識の対立を規定する構造的諸条件を明らかにしようとしたものである。具体的には、以下の三つのテーマを設定している。第一に、明治初年から同時代に至る実録・政治小説等を対象に、当時の日本人が持っていた東アジアの将来像や、その伝統的な歴史文学の世界観との連続性について探究すること。

第二に、日本・朝鮮(韓国)・台湾における

当該戦争（その後数年を含む）の記録や歴史叙述を比較検討し、双方の差異と関係性を明らかにすること。

第三に、後代における戦争の記憶の語られ方について、上記三地域の文学テキスト（自伝等を含む）について比較検討し、その構造的特徴を明らかにすること。以上である。

3. 研究の方法

上述の三つのテーマに関し、具体的に以下の方法によって研究を進めた。

第一に、明治6年の征韓論以降、当該戦争に至る約20年間に生産された実録等の分析を通して、当時の人々が持っていた多様な東アジアの将来像を復元し、その中に実際の歴史の成り行きを埋め戻して比較検討すること。実録とは明治初年から10年代まで繰り返し刊行された『近世太平記』『明治太平記』等を指しているが、楠正成に仮託された「草莽の志士」的エートスを含んでいる一方、台湾・朝鮮に対して1894～1896年戦争を先取りする意識をも見せている点で検討に値する。本研究では現在を将来にさし向けられた可能性の束として考えることを通じて、当該戦争の現実の帰結が齎したものと異なる別の歴史意識の可能性について思考することが出来る。また、これら実録等の再評価を通じて、非政治的な小説を中心とするのではない明治文学史の構築に向けた足掛かりを得ることも期待できる。

第二に、朝鮮・中国東北地方・台湾等で当該戦争に関与した人々の言説を収集し、台湾・朝鮮側の言説と比較検討すること。

さらに、第三に、当事者の世代が去った後の時代における、当該戦争に関する記憶の語られ方について検討を行うこと。日清戦争の記憶は帝国日本の正統性に根拠を与えるものであり、それが次世代にどのように継承させられていったかを考察することを通して、帝国日本の自己認識の総体、ひいては戦後日本人を含む東アジア各地域の人々の歴史的「無意識」を解明することができると思われる。

4. 研究成果

上述の三つのテーマ(三つの時期)のうち、第一のテーマに関して論文5)と研究発表3)、第二のテーマに関して論文1)3)および研究発表1)2)4)、第三のテーマに関して論文2)4)および研究発表5)6)の研究成果を得た。

論文5)は1894～1896年戦争の前哨をなす、1874年のいわゆる「台湾出兵」をめぐる諸言説、特に当時の日本国内における戦争熱に関する分析検討を行ったものである。この論では、1894年戦争を通して現実化する、帝国日本の中国・台湾に対する侵略的眼差しは、

すでにこの 1874 年時点で一定以上成立していたこと、1874 年時点では結果的に清国との戦争は避けられたものの、その危うさに関する思考は回避されたことを論じている。

学会発表 3) は、明治維新の立役者たちが大きな影響を受けたとされる頼山陽に関する幕末・明治前期の諸言説を検討したものである。1882 年に明治天皇が下賜した軍人勅諭には彼の思想の影響が明らかであり、1893 年の山路愛山と北村透谷の「人生相渉論争」にも示されている、帝国日本の公定文化としての「頼山陽的なもの」の射程距離の大きさについて論じている。

論文 1) は中国・北朝鮮国境の鴨緑江を挟んだ中国側に位置する国境都市・丹東(戦前の旧名は安東)に関する韓国海洋大学の研究叢書に寄稿したもので、1894 年戦争に軍医として参加した渡辺重綱の日記(かつて大谷正氏によって紹介された)の新たな読解を通して、戦時下の現地住民に対する彼の眼差しの諸相について分析したものである。

論文 3) は当該戦時下に上演された歌舞伎『明治産会津組重』や当時の新聞記事等の分析を通して、同時代の横浜・神戸を代表とする居留清国人に対するメディアの眼差しの諸相を分析している。

学会発表 1) は前近代から当該戦争に至る諸言説の紹介を通して、前近代日本において、東アジアの(感情移入できない)他者に対する対等な関係性の自覚に基づいた認識が蓄積されなかったことが、当該戦争以降の植民地主義の土壌をなしていることを指摘したものである。そのうえで、その克服の方向性について、泉鏡花『海城発電』、火野葦平『兵隊』等を用いて検討している。

学会発表 2) は、当該戦争開戦当時の日本の諸言説を(明治天皇の開戦詔勅を含め)紹介し、主戦論者の福沢諭吉と対照をなす勝海舟の言説について検討している。

学会発表 4) は海港都市神戸における多重所属者の文化的系譜について論じたものである。その中で、ラフカディオ・ハーンが当該戦時下の神戸で執筆したエッセイ『門づけ』を扱い、好戦的な周囲の雰囲気と背を向けるようにして、幽かな音を介した時空を超越する交感の意義について思索を展開するハーンの姿勢について論じている。

論文 2) および学会発表 5) は当該戦争前後に起源をもつ日本の産業化の帰結である水俣病と正面から取り組んだ石牟礼道子のテクスト群とその語り口に、前近代日本における非定住民(非農業民)の「記憶」を読み込もうとする試みである。

論文 4) は同じく当該戦争前後の産業化の流れの中で形成された九州炭鉱地帯の現実と、中世の和泉式部伝説を交錯させた秋元松代の戯曲『かさぶた式部考』に関する考察である。

学会発表 6) は、現代日本人の東アジアに関する心象地理が、当該戦争から 1945 年に至る帝国日本の時代の価値観に、いまだに大きく束縛されていることを指摘、その心象地理を食い破る文学作品の幾つかを紹介したものである。帝国日本の実質的始発の時期である当該戦争の重要性、にもかかわらず日本ではその認識が忘却されていること、その忘却が今日の東アジアの諸問題と直結していること等に言及している。

なお、これらのほかに、第一の時期に関わる研究成果として、本来、論文『『太平記』の明治 - 交差する情念と歴史 -』の『アナホリッシュ国文学』8 号への掲載が確定しており、2015 年度時点で最終校正まで終えていたのだが、編集責任者の長期入院等の予期せぬ事態により、未刊行のまま現在に至っていることを書き添えておきたい。

当該研究課題は大変スケールの大きな問題を扱っており、5 年間の研究を経てもその一部を解明できたに過ぎない。今後も継続的に当該研究課題に関わるテーマについて追求していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件、共著・分担執筆を含む)

- 1) 樋口大祐、1895 年の安東及び周辺地域と日本軍医 - 渡辺重綱『征清紀行』について -、権京仙・崔洛民編『丹東、断絶とつながりの海港都市』、査読無、図書出版ソニン、2018 年刊行予定、編集部からの依頼により 2017 年 7 月寄稿、掲載箇所の数未定
- 2) Daisuke Higuchi, "Representations of Nomads in the Works of Ishimure Michiko", *Ecocriticism in Japan*, edited by Hisaaki Wake, Keijiro Suga, and Yuki Masami, 査読有, Rexinton Books, 2017, pp.203-222
- 3) 樋口大祐、日清戦争と在留清国人表象、小峯和明監修・金英順編『シリーズ 日本文学の展望を拓く』第 1 巻『東アジアの文学圏』、査読無、笠間書院、2017 年、386 ~ 401 頁
- 4) 樋口大祐、二十世紀における和泉式部伝説 - 『かさぶた式部考』における「救済」について -、張龍妹・小峯和明編『東アジアの文学と女性と仏教』、査読無、勉誠出版、2017 年、277 ~ 290 頁

- 5) 樋口大祐、1874年の「台湾危機」、井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』、査読無、勉強出版、2016年、411～437頁

〔学会発表〕(計6件)

- 1) 樋口大祐、「境界のポリティクス」の彼方へ - 戦争叙述における複数の視点の可能性について -、EAJS(ヨーロッパ日本学会)2017年度国際学会、新リスボン大学、ポルトガル・リスボン、2017年9月1日、(兵藤裕己、高木信、本橋裕美と共同パネル)
- 2) 樋口大祐、1894～1896年戦争における「主戦論」「非戦論」再考、EACJS(東アジア日本研究協議会)第1回国際学会、仁川松島コンヴェンシア、韓国・仁川、2016年11月30日、(嘉指信雄、奥村弘、濱田麻矢と共同パネル)
- 3) 樋口大祐、明治時代における頼山陽の享受史、「歴史と文体」研究会、学習院大学、東京、2016年9月24日
- 4) 樋口大祐、戦時下海港都市の多重所属者の表象について、第12回海港都市国際学術シンポジウム、長崎大学、長崎、2016年2月20日
- 5) Daisuke Higuchi, Representations of Nomads in Circum-Shiranui Sea Area in the Works of Michiko Ishimure, 第11回海港都市国際学術シンポジウム、台湾中央研究院、台湾・台北市、2015年4月25日
- 6) 樋口大祐、見えない国境線 - 1940年代と小説 -、韓国日本研究総联合会第4回国際学術大会(招待講演)、慶北大学、韓国・大邱市、2015年4月11日、招待講演

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
樋口大祐(HIGUCHI, Daisuke)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：90324889

(2) 研究分担者
なし

研究者番号：

(3) 連携研究者
なし()

研究者番号：

(4) 研究協力者
なし()